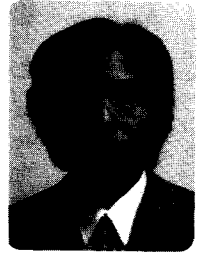


特集

生徒指導の推進

—これからの生徒指導の在り方を求めて—

論説



これからの生徒指導の考え方

国立教育研究所 生徒指導研究室長

滝 充

一 これからの生徒指導に求められるもの

昨今、続発している少年事件を例に挙げるまでもなく、今の学校教育は子どもを社会の一員としてふさわしい大人へと育てることに成功しているとは言いがたい。そうした事件は、いじめや不登校、暴力行為や学級崩壊など、生徒指導上の諸問題が解消されていかなことでの延長上にあると言ってもよい。換言すれば、子どもの社会性を育むはずの学校教育がうまく機能していないということであり、学校教育、とりわけ生徒指導は新たな対応を求められている。

十数年前の生徒指導は、反社会的行動を抑えることが中心であった。逸脱する者を枠内に戻し、逸脱しそうな者に警告を与える指導が中心であった。私はこれを「取り締まり型」の生徒指導と呼んでいる。警察によるスピード違反の取り締まりに似た発想だからである。そして、これはそれなりに成果をあげてきた。

ところが、そうした発想では現在の問題に対応できなくなっている。たとえば、いじめかどうか見極めるのは、服装違反か否かを見極めるように簡単にはいかない。また、かつてのように暴力をふるいそうな者をあらかじめ予測することも困難である。表面的には問

題のなさそうな「普通の子」が「突然キレる」こともある。不登校やいじめは「いつ誰に起きても不思議ではない」と言われているが、今の子どもは多かれ少なかれストレスを抱え込んでいる。そして、それは非社会的行動の遠因であるだけでなく、反社会的行動の遠因ともなっている。

それゆえ、結果的に現れた彼らの問題行動を抑えるだけではなく、その背景にあるストレス状況を解消したり、それに対処できる子どもを育てることが求められている。こうした発想の生徒指導を、私は「教育相談型」と呼んでおり、従来の事後対応中心から「予防教育」中心の指導にシフトしたものと提案をしている。

二 「教育相談型」はカウンセリングではない

「教育相談型」と呼ぶと、「私もカウンセリングが大切だと思っています。研修も受けました」などと誤解される先生もでてくるかもしれない。しかし、私の提案の趣旨は、そうしたものは全く違うことに注意していただきたい。

確かに、学校でも専門的なカウンセラーによるカウンセリングが必要な時代になってきた。教師による指

導では対処できない事態、簡単に言えば治療が必要な子どもが現れているからである。しかし、勘違いしてほしくないが、カウンセリングが生徒指導の代わりになるはずもなければ、それで社会性が育つわけでもない。外部の専門家としてのカウンセラーが生徒指導に関わることは好ましいことだが、教師をカウンセラーに、指導をカウンセリングに置き換えればよいかのような短絡的な発想は誤りである。「開発的カウンセリング」を主張する人もいるが、それは「カウンセリングの考えや方法を活かした指導」、「子どもの心に配慮した教育」に過ぎない。カウンセリングという名称にこだわる意味も必要もないばかりか、そう呼ぶことで教育や指導を治療の延長上のイメージで捉えさせかねない点からは、むしろ問題とさえ言える。

治療と教育とを混同することの問題の一つは、一人の力量だけで子どもを導き育てられるかのような発想をしがちになる点である。カウンセリングの手法を用いれば、個人的な対応だけでも問題が解決できるかのように誤解する人々のおかげで、ただでさえ連携協力のできていない学校の教育力は一層低下してしまう。

疲れ果てた子どもが自力で立ち上がれるよう支援す

るときには、一対一のカウンセリングが有効である。時には集団カウンセリングも役に立つ。しかし、かわりあい求め、力をもて余している子どもたちには、実際にふれあって活動する場をつくってやることこそ必要である。そうした様々な他者とのかわりあいの中でこそ、社会のルールや他者に対する配慮の必要性に気付き、成長していくからである。それを一人の力で成し遂げたい、カウンセリングの技法を用いられ成し遂げられると考えているなら、教職員のほうが病んでいると言わざるをえない。

三 家庭だけで子どもは育たない

たとえば昔の地域では、様々な大人が子育てに関わっていた。いや、大人ばかりかきょうだいを含む子ども同士の遊び集団さえもが、子どもの社会性を育むのに寄与していた。

誰もが小さいころは年長者にお世話をされて育ち、大きくなれば年少者のお世話をする側にまわる。良くも悪くも年長者は年少者のモデルとなり得たし、それが年長者の自尊感情を高めて年少者のお世話を促す、というサイクルがあった。子どもは子どもの中で育つたし、親はなくとも子どもは育つた。もちろん、それ

育書が教職員に重宝がられている様子は、育児書片手に密室の子育てに励んでいる母親の姿にも通ずる。

親と子の関係だけでは子どもが育たないのと同様、同年齢の子どもと担任だけからなる学級は、子ども同士が育ち合う場、社会性を育む場としては不向きである。学級内でいくらゲームやロールプレイをさせても、子ども同士の育ち合いには発展しにくい。お世話をしたりされたりとの関係設定がむずかしいうえ、担任がガキ大将を演じて子どもモデルにはなりえないからである。子どもは巧みに「操られ」、「育てられ」てはいっても、互いに「育つ」ことはない。

そもそも、個々の学級がしっかりしていれば学校全体としてうまくいく、というのは大きな勘違いである。個々の学級の取組が、学級全体として予定調和する根拠などどこにもないからである。調和するためには、学校全体として子どもにどう育ってほしいのかという、教職員に共通の目標がなければならぬ。それがあるから初めて個々の学級づくりが調和していく。かつての学校には、それに対する暗黙の了解もあつたろうが、今の時代にはそれは期待できない。

五 学校の教育力の回復

を見守る地域の大人の存在もあつた。親が子を一対一の関係の中で育てる以上に、子どもは年長者やまわりの大人の影響下で育つたのである。

ところが、都市化による近隣関係の弱体化によって地域の教育力は低下し、それにとりなって子育てはもっぱら家庭の責任であるかのように、すなわち家庭だけで子どもが育つかのような世論が形成されてきた。だが、それが幻想であることは、昨今の事件に見られる両親の無力さから明らかである。そもそも他人同士が支えあつて社会が成り立っていることを、身内だけでの家庭で伝えきることがむずかしい。少子化や核家族化が進めば、家庭内だけで社会性を育てることなど不可能である。

四 学校の教育力の喪失

ところが、いまや学校さえもが家庭と似た状況にある。学級の子どもをきちんと育てられるかどうかは学級担任次第と言わんばかりの雰囲気は小学校にはあるし、中学校でも教科や校務分掌の範囲内で関わればよいかのような風潮がある。すなわち、個々の教師の努力だけで子どもを育てられるかのような幻想が蔓延している。学校づくりが視野にない学級づくりだけの教

新潟県の『いじめ防止学習プログラム』がとりあげたピース・メソッドは、学校ごとの教育課題と教育目標を明確にすることで、個々の努力が有機的に結びつく学校経営・生徒指導を実現する手法である。学校全体の大きな流れを前提に、学級や教科の垣根を越える大きな視点から活動を組まない限り、学校は子どもが育つ場としてはおろか、育てる場にさえなり得ない。

私は、小学校などで行われてきた「異学年交流」の発想を、子ども同士が育ちあう学校づくりという点から重視し、『ピア・サポート・プログラム』という活動を提案している。そこで私が強調している点は、決して一部の学級や一部の教職員だけでそれを実施しないことである。全教職員がかつての地域の人々と同様、様々な立場から学校のすべての子ども達の発達を見守る気になって初めて、子ども同士が育ち合う場を学校に復活させられると考えるからである。

個々の教職員が「個人の力量」をいくら高めたところで、「学校の教育力」の向上には結び付かない。子どもを一人の力だけで育てることはできないことに教職員が思い至らない限り、「予防教育」としての生徒指導は実現できない。